

LostGirls

-失われたひとりの少女-

傾き屋

Children of the future age,
Reading this indignant page,
Know that in a former time
Love, sweet love, was thought a crime.
(A Little Girl Lost / William Blake)

この悲憤のページを読む 未来の時代の子供らよ

(ウィリアム・ブレイク『失われたひとりの少女』より)

失うばかりの人生に生きる意味はあるだろうか。本当は、己の価値観を変えて生きるのが、賢い生き方なのだろう。これまでの人間の歴史は、とそうした人々によって紡がれてきたはずだ。

一方で、私のように過去に囚われたまま、後ろ向きの原動力で、流れに抗いながら生きてきた愚か者の中にはいたはずだ。

そんな人間の都合などお構いなしに、今日も澄んだ風が吹く。南の空に陽が昇り、私の歩いてきたアスファルトの道を照らす。片側一車線の道路はその両側を深い緑に覆われ、波のように揺れている。うねりながら高くなっていく山道には、歩く者ばかりろん、車の一台も見かけない。

この先には、人里もなければ観光に適した景観もない。ただ、隠れるように枝分かれする小道を進むと、私に向かう怪しげな研究所が建っているくらいなものだ。

「最寄り駅まで職員を迎えに行かせますから」という申し出はあったけれど、どうもそんな気持ちになれず、その結果としてこうして真夏の信州を独り歩き続ける羽目になったのだった。

ここ信州南部に位置する、通称「診療所」に初めて足を運んだのは、もう十年も近

く前のことになる。まだ私とメリーが京都の大学に通っていて、まだ二人で活動していた頃の話。ほんの出来心から飛んでいった宇宙旅行で怪我をしたメリーが病院をたらい回しにされた挙句にたどり着いたのが、この隠れた診療所だった。知らぬ間に連れてこられたといメリーから、ここの場所を聞いたのは、もう退院が決まったあとのことで、それまでの半月は所在も分からず、不安な日々を送ったことを覚えている。

国内に身寄りのなかった彼女が引受人として私を指名しなければ、知ることも、来ることもしなかつたこの場所は、表向きこそ診療所となっているが、その実態は生命科学を追い求める異端の研究所。

メリーを向かえに行つたときは単なるビジターだった私、宇佐見蓮子が、今では当の研究所から招かれる身となつたのだから、人生は面白い。

振り返ってみると、一人で宇宙に行つた一連の出来事が、秘封倶楽部の行く末を決定づけた、運命の分かれ道だったのだと、私は今になって気付いた。私はまた、あの場所へメリーを迎えに行く。永い眠りについたマエリベリー・ハーンと再会するため、私はまた、長い坂を上っている。

あの旅行を終えたメリーは自身の能力を開花させ、いつしか私の手が届かない遠い世界を覗くようになった。また、それと呼応するように、私は足を動かさなくなつていった。自分がやつてきた向こう見ずな冒険が、どれだけちつぽけなものか、その限界を悟つた私は、意気揚々と不思議を語るメリーを一步引いた目で見るが増えた。きつと自分はオカルトの世界から離れていくだろう、という予感が外れ、こうして今、オカルトの総本山たる施設に向かつているというは何たる皮肉だろう。

大学生活も四年目を過ぎたころ、比較的平和な文系学生のメリーと違い、時間的拘束の強くなつた私は、彼女から逃げるように学業に専念しはじめた。メリーからの電話にも「実験の都合で」とか「学会の準備が」とか、その場しのぎの言い訳で切り抜けることが多くなり、疎遠具合は負のスパイラルを描くようになった。

そんな中でも、どうにか時間を合わせて活動したり、彼女が一人で歩いた道筋を築しように語られるのが、私にはたまらなくつらかつた。

自分が主体となつて計画ができなくなつたからではない。メリーの力が増して、危険に巻き込まれることが増えたからでもない。同じ方向に向かつているのに、私にはその先にあるものが見えなかつた、それがただつらかつた。

もはやそれは二人の活動ではなく、私はコンダクターに付き従う同行者でしかなか

った。そして、もう私の中には、現状を変えてやろうというモチベーションが失われていることに気付いてしまった。

だから、メリーと連絡が取れなくなったときも、自分はずいに見限られたのだなと思いはしたものの、まさか彼女があんなことになっていようとは、微塵も思い至らなかった。

緩い坂を無言で登る。

大きな荷物はすでに送ってあるので手さげひとつの私だが、罪を背負った巡礼者のように背中に重みを感じていた。それはこの先で待つモノが放つ無言の圧力か、自らの内に存在する罪悪感のせいか。

次第に狭くなる歩幅に抗いながら、それでも一步一步と山道を登る。ろくに整備もされていないアスファルトの車道は、例年の熱気で所々にひびが割れ、そこから力強く草が伸びている。人の手を離れた世界は、こうして自然に還っていくのだろう。

すっかり日が昇った昼の時間だというのに、すれ違う車の一台も見かけない。この道は本来、山越えのために作られた旧道であるから、その役目が終わった今となっては仕方のないことかもしれないが、代わり映えしない景色の中になると、変化の乏し

さに不安が募る。まだ陽が落ちるまで時間あるが、そこに待つのは完全な闇だ。学生時代の冒険で、光なき世界の恐ろしさを十二分に味わったことがあるからこそ、身構えることもある。

疲れの出はじめた体に力を込めて、前へ前へと歩みを進める。ブラウスの袖をまくり、帽子を団扇がわりに扇いで風を起こすと、少しは暑さが紛れた気がする。こんな旅人みたいな真似をしたのも、だいぶ久しぶりのことだ。学生時代は躊躇いなくできていたことが、大人になると出来なくなる。

私はまだ、抗えるだろうか。

あるとき うら若いふたり
世にもやさしい思いに満たされ
かがやかしい園で出会った

黄金の時代に 冬の寒さから解き放たれ
きよらかな光に身を輝かす わこうど おとめ
まはだかで 日の光をよろこぶ